

連載講座

第24回

家は海に建てろ・徳川家康

作家 童門冬二

豊臣秀吉は関白太政大臣になると、全国の大名に向かって命令した。

「今後、私戦はゆるさない。そのことを、京都にきて天皇に誓え。仲介はわし（秀吉）がする」

これは天皇の名を利用して、秀吉が全国の大名に対し「わしの家来になれ」といったことを意味する。ほとんどの大名がこの命令に従った。秀吉を無視することができなかったからである。しかし反抗する大名もいた。薩摩の島津氏、土佐（高知県）の長宗我部氏、小田原の北条氏そして奥羽の伊達氏だった。秀吉はこの四人に対し「征伐」というドラスティックな名目を掲げた。秀吉にすれば、

「今度の私戦禁止は天皇の命令であって、これに反対する者は天皇に背くとおなじことだ。したがってかれらは朝敵である。それを討つわしの軍は天皇軍であって、豊臣軍ではない」

と宣言した。だから征伐と称したのだ。この理屈の前に、薩摩の島津氏はたちまち降伏し、四国の長宗我部氏も降伏した。天正十八年秀吉は三番目の朝敵北条氏を討つべく、小田原に向かった。小田原の北条氏はしばらく交戦したが、やがて降伏した。このとき奥羽から伊達政宗も駆けつけて、秀吉に降伏した。情報に機敏な政宗は秀吉が次々と朝敵を降伏させるのを見て、

「抵抗すれば伊達家はほろぼされる」と判断したのである。小田原の北条氏が降伏したとき秀吉は

徳川家康にこういった。

「旧北条氏の領地をさし上げる。その代わり、いま持っている領地を返納してもらいたい」

当時家康が持っていた領地は、いまの愛知県・長野県・山梨県・静岡県などである。この話をすると家臣は猛反対した。

「秀吉公は、うまいことをいって殿（家康）をどんだん東から北のほうへ追い払おうとしている戦略です。反対してください」

「そうはいつてもな、いまのわしは秀吉殿にはかなわぬよ」

家康はそういつて笑った。そして、

「わしも天下には望みがある。しかし焦ってはダメだ。すべて、人生は重い荷を担いで遠い道をいくようなものだ。急いではならない」

そう論じた。そうはいうものの、当時の江戸地帯はひどい地域だった。利根川が荒川や墨田川に注いでいるので、雨期には水びたしになる。また、入城する江戸城もひどいありさまだった。ボロ城で、城内の堀に渡されているのは橋ではなく、船板だった。建物も相当傷んでいる。北条氏が支配する小田原城の支城だったが、小田原城に力が注がれたので支城の江戸城はしだいにボロ城になってしまったのである。入城した家康とその家臣たちは思わず目をむいた。まさか江戸城がこんなひどい状況になっているとは思わなかったのである。しかも、周辺の住民たちが家康の入国に反対した。

いまでいえば、プラカードを掲げながら、

「帰れ徳川、出ていけ家康！」とシュプレヒコールをあげながらデモ行進をするのとおなじ状況だった。このことは勝海舟が、のちにジャーナリストに語っている。

「家康公は、江戸入国のころひどいご苦勞をなさった」

と。その理由は、小田原城の北条氏が江戸地方にも善政をおこなって、住民たちが非常に北条氏を慕っていたからである。北条氏は五代百年にわたって関東地方を治めた。初代の早雲が非常に人情家で、住民に対し年貢を安くし、とくに福祉政策を重んじた。老人対策はなかでも群を抜いていた。この方針は、代々つづいたので、百年間に関東地方の住民はすっかり北条氏を慕うようになっていたのである。そこへ徳川家康というあまりきいたことのない大名が入ってきたので、住民たちは不安に思い、いっせいに反対運動を起こしたのだ。家康の事蹟に対する記録では、

「関東打入り」

と書いてある。つまり、敵国に入国するような状況だったということだろう。住民たちの反対運動に家康の腹心である本多正信などが反対した。

「新しい領主に対し住民の態度は無礼です。みせしめのために武力で鎮圧しましょう」と進言した。ところが家康は笑いながら首を横に振った。

「よせ」

「なぜですか」

「五代百年にわたって善政を敷いた北条氏と、人気争いをしてはわしはかなわぬ。やめておけ」

「どうするのですか？」

「いまの状況では、住民に北風政策をとっても逆に抵抗の心を煽るだけだ。春風対策でいこう」

「春風対策とは？」

「住民の心をなだめる政策をおこなうのだ。北条氏以上の善政を施すことが必要だ」

「そんな生ぬるいことをいっていたのでは、われ

われ武士の住む場所すら得られませんぞ」

本多は怒ったようにいう。ところが家康は、

「いや、住むところはある」

「どこですか？」

「城の前だ」

家康は城の前に視線を向けた。本多たちも家康の視線を追って眼をむいた。江戸城の前は海だったからである。いや前だけではなくすでに海の波がヒタヒタと城の石垣にまで押し寄せている。本多は怒った。

「殿、眼の前というのは海ではありませんか」

「そうだ。埋め立てて家を建てよう」

「?!」

本多たちは呆れて顔を見あわせた。しかし、家臣もバカではない。家康のきもちをよくわかった。家康は子どものころから今川家の人質になって苦勞してきている。だから民衆のきもちをよくつかんでいた。たしかにこんなときに無理をすれば、住民たちはいよいよたけり狂いその反対運動はさらに激しくなるだろう。ここは一旦引いて、海を埋め立て住居を得ることのほうが先決かもしれない。我慢強い家康に仕えてきた家臣たちは、家康の気質を知ると同時にその戦略も知っていた。北風対策ではなく、春風対策でいこうという家康のきもちもよくわかった。そこで正信が指揮をとって、いっせいに海の埋め立てがはじまった。急がなければ自分たちの住む家さえ得られないからである。大規模な埋立地は主として武士の住居や、家康に従ってきた商人たちの住居となった。現在の東京都千代田区・中央区・港区などのすなわち、霞ヶ関の官庁街や、丸の内のビジネス街、神田やその他にわたる商人街などは、すべてこのときに埋め立てられた土地の上につくられた。家康の我慢強い政策は成功し、その後江戸の市民をはじめ関東地方の住民たちも、しだいに徳川家の政治に慣れていった。